

(2) 保育の目標

- ア 保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。
- (7) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満ちし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。
- (イ) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。
- (ウ) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にする心を育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。
- (エ) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。
- (オ) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。
- (カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。
- イ 保育所は、入所する子どもの保護者に対し、その意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、保育所の特性や保育士等の専門性を生かして、その援助に当たらなければならない。

 **ここがポイント!**
② 非認知的能力の意味 & 愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感


解説

**保育の目標を考える時に必要なこと 1
非認知的能力の意味**

欧米では保育・幼児教育のニーズの高まりに対応して、これを国の基礎的な教育制度として位置付けていくという機運が高まっています。保育・幼児教育予算が各国とも以前より伸びています。その背景には貧困等の格差拡大の解決と

いう問題、21世紀的な解の見つかっていない課題への接近能力の育成などの問題があるのですが、そのためには、教育の開始期をできるだけ早めることが大事だということが提言されはじめました。この間、それまでの諸研究が総括さ

れ、子どもの教育はできるだけ早くから開始するほうが効果が大きく、費用がかからないこと、また、その教育はいわゆる認知的スキルだけでなく、非認知的スキルを伸ばすことで後の効果が大きく、持続するという点も見いだされました。

認知的スキルは、記憶できるとか、知識を正確に理解するとか読み書きができるなどのいわゆる学力に相当する知力です。身に付いているかどうか目に見えやすい能力ともいえます。これももちろん大事なのですが、同時に、好奇心が豊か

か、失敗してもくじけずそれを上手く生かせるとか、必要なことには集中、我慢ができるとか、自分にそれなりに自信があるとか、楽天的であるなど、心や自我の能力、つまり非認知の能力が高いことが、社会で上手く生きる上ではより大事な能力だということです。そして、その基礎が乳幼児期に育つということがわかってきて、この力を伸ばすことが課題になってきたわけですね。子どもの気持ちを大事にする保育、やりたい時に存分にそれを保障するような保育が大事になるでしょう。



解説

**保育の目標を考える時に必要なこと 2
愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感**

乳児、1、2歳児の保育についての記述が充実された背景には、ポイント①やこの②の中でも少し述べましたが、人間の育ちの中で、0、1、2歳児段階の育ちの意味がとても大きいということがわかってきたことがあります。そこで、この時期の保育をもっと丁寧に質高く行わねばならないということです。

愛着行動とか愛着関係という言葉があります。アタッチメントという語の訳語です。これは誕生後しばらくの時期の人の育ちには、特定の誰かとの深い信頼関係、その人の傍にいて安心を深く感じるという感情、心の絆が生まれるような関係が必要という考え方です。そこでは、授乳のような母性的行為がアタッチメントを育むとされましたが、しかし、そうではなく、柔らかい感触への欲求を満たすことがアタッチメントを生み出すとする考え方もあり、議論になりました。

今では、子どもの欲求に丁寧に応答する行為と柔らかい感触と子ども自身の自由な探索行動の保障という3つがなければ赤ちゃんは上手く育たないということが共通に確認されるようになってい

ます。アタッチメントというのは元来しがみつくと意味ですが、不安があるとしがみつかる他者が傍に日常的にいて、不安や欲求不満がある時、常にその人にしがみつくとすることができるため、その繰り返しの中で子どもの心の中にその人への深い信頼感が育ち、やがて他者一般への信頼感を身に付けていきます。それは裏返せば、自分は無条件でありのまま愛されているという感覚になります。前者が基本的信頼感、後者が自己肯定感です。この時期の保育には、こうした愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感の育ちを意識した展開が不可欠なのです。